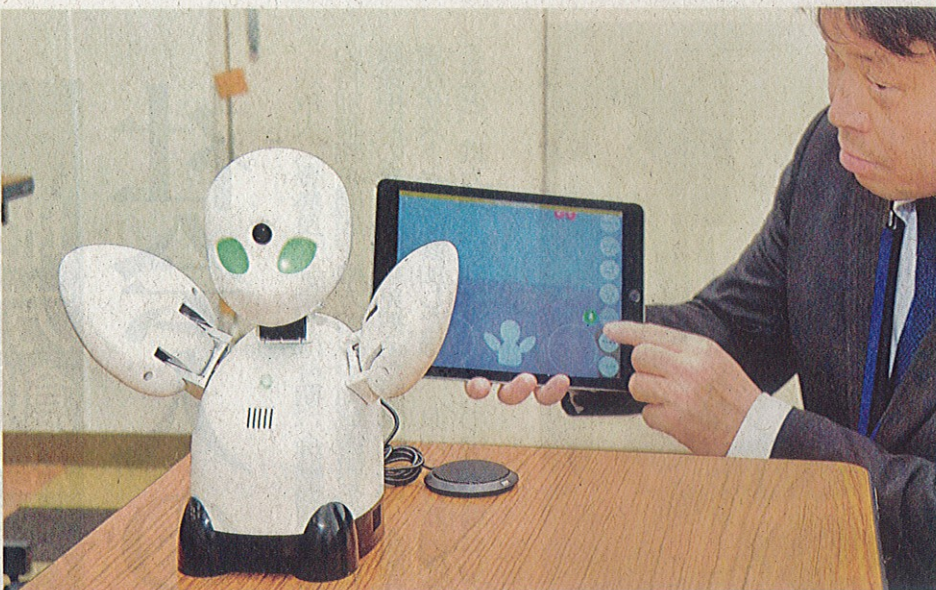


病室から授業参加、分身ロボ「オリヒメ」

鳥取県教委が本格導入する分身ロボット「オリヒメ」



新年度に本格導入

鳥取県教委は、同時双方向通信ができる分身ロボット「OriHime（オリヒメ）」を新年度に本格導入する方針を固めた。鳥取養護学校、皆生養護学校、米子市立就将小の3校を拠点校として計8台を配備する。病気療養中の子どもが病室や自宅にいながら学校の授業に参加できる環境を整え、学習や円滑な学校復帰を支援する。他校の子どもにも貸し出してどこでも使えるようにする。

（渡辺暁子）

オリヒメはカメラやマイク、スピーカーを内蔵する。手を挙げる、拍手する、うなづくといった動作をタブレット端末で遠隔操作できるほか、会話もできる。操作側は病室など周囲の環境や療養中

円滑な学校復帰支援

鳥取県教委3校に3点

の姿を見せることなく使うことができる。

日本財団共同プロジェクトとして2017年度から3校で実証事業を行ってきた。

県教委によると、入院や自宅療養で通学できない子どもは教員と1対1か1人で学習することが多い。オリヒメを使えば集団学習だけでなく、行事にも分身として参加できる。実証事業では、子どもの社会性を養い、友人との関わりを保つことでスムーズな学校復帰につながるなどの効果があったという。

県教委は関連経費664万円を新年度当初予算案に計上した。特別支援教育課は「人とのつながりを感じられることは大切。子どもの集団の中での学びや成長を豊かにしていければ」としている。

文部科学省は昨年9月、病気療養中の小中学生を対象にした遠隔教育を充実させるよう通知していた。